日本中国語学会会報　2024年6月

https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/

◆目次◆

ご挨拶　　佐々木勲人（日本中国語学会会長）.....2

支部例会実施報告　2024.1-2024.5.....3

会議報告.....7

全国大会および支部例会、「中国語学セミナー」開催のお知らせ.....11

2024 年能登半島地震に関わる会費免除について.....12

『中国語学』第 256 号から第 265 号までの電子アーカイブ化に伴う著作権行使の許諾に関する公告（お願い）.....13

事務局からのお願いとお知らせ.....14

ご挨拶

佐々木勲人（日本中国語学会会長）

1946 年、中国語学研究会として発足した私たちの学会は、昨年 10 月に設立七十七周年を迎えました。喜寿を祝う節目の年に、本会の活動を支えてくださった先人のご尽力に対してあらためて感謝申し上げたいと思います。この先も八十年、九十年、百年とさらなる発展が続きますよう、二年間の事務局運営に取り組んでまいります。非力ではありますが精一杯つとめますのでよろしくお願いいたします。

春休み、前任者の竹越孝先生からいただいた引継ぎ資料を確認していく中で、本会が置かれた状況が予想以上に厳しいものであることを知りました。この十年で会員数はおよそ 4 分の 3 にまで減少しています。それを反映するかのように、大会参加者や投稿論文数も減少の一途を辿っています。これまで中心となって活動されてきた先生方が次々と第一線を退かれ、大会や研究会でお目にかかる機会も少なくなってしまいました。近年、大学を取り巻く環境が厳しさを増しているためか、研究者を志す若い世代の入会も以前ほど多くはありません。このままの状況が続けば、歴史と伝統ある本会も衰退の二文字から逃れられないのではないかという危機感を持ちました。

就任のご挨拶としては相応しくない話を申し上げてしまいました。しかし、この機会にみなさまと現状に対する認識を共有し、その上でできることから少しずつ学会の活性化に取り組んでいきたいと考えています。その一つは、会誌『中国語学』の活性化です。上に述べましたように投稿論文数が減少しています。それに伴って掲載論文数も減っています。会誌は会員が研究成果を発信する場であると同時に、学術情報を受信する場でもあります。二つの役割を維持するためには、掲載される論文の質の確保と同時に量の確保も欠かせません。現在、吉川雅之編集委員長を中心に改革案の策定に取り組んでいただいています。秋の総会には、具体的な内容をお示ししたいと考えています。

もう一つは、全国大会の活性化です。新型コロナ感染症の影響により、全国大会は数年にわたってオンライン開催を余儀なくされました。未曾有の事態への対応を迫られた開催校や大会運営委員会、事務局のご苦労は想像するに余りあります。オンライン方式のメリットも知ることができました。しかし、昨年の目白大学の大会に参加して久しぶりにみなさんのお顔を拝見すると、やはり対面方式には及ばないことを強く感じました。全国大会に一人でも多くの方にご参加いただき、会員相互の交流を深めていただきたいと考えています。橋本永貢子委員長を中心とする大会運営委員会では、新しい企画の準備が着々と進んでいるようです。関西外国語大学（大阪枚方市）で開催される今年の全国大会にどうぞご期待ください。

新しい事務局は、副会長を京都大学の松江崇さんに、幹事を京都産業大学の今村圭さん、大東文化大学の上田裕さん、関西大学の金佳さんにお引き受けいただきました。いまだ手探りの状態ではありますが、新メンバーで力を合わせて運営にあたっております。ご意見やご要望などございましたら遠慮なく事務局までお寄せください。みなさまのご支援とご協力を切にお願い申し上げます。

［2024 年 6 月 10 日記］

2024 年 6 月

支部例会実施報告　2024.1-2024.5

◆北海道支部例会

◇第 1 回：2024 年 3 月 16 日（土）午後 1 時～　オンライン（Zoom）による開催

・中村真衣佳（北海道大学大学院）：日本語の知覚を表す自動詞文の中国語翻訳

日中言語の事態把握の違いはどのようなものか。本発表は話し手の表現の仕方が両言語でどのように異なるのかを検討するため、日本語の知覚を表す「～が見える」「音がする」などの自動詞文の中国語翻訳を調査した。中国語翻訳は①知覚を表す動詞を使用した場合にほとんどが他動詞文であること、②知覚を表す動詞以外を使用した場合は知覚される対象が動作主となる他動詞文に翻訳されることを指摘する。また、日本語の知覚を表す自動詞文はエコロジカルセルフ（本田 2005）で捉えられるが、中国語は「視座の移動により知覚者としての自己および知覚という出来事を対象化して視野の中に捉えて明示的に表現している」（本田 2005:160）。

・山田敦士（日本医療大学）：語彙体系の細分化・非細分化の事例研究：ワ語と漢語の対照から

民族言語学（ethnolinguistics）の主な課題は、言語事実に反映された当該民族の文化的認知を分析すること、つまり範疇化の諸相を解明することにある。語彙は言語事実のうちでも範疇化の特徴が比較的観察しやすい領域である。本発表では、中国雲南省の少数民族であるワ族の言語（ワ語）と漢語について、「切断」「洗浄」「摂食」「発話」「授受」「発生消失」などの動詞類、「親族」「ライフステージ」「色彩」「時間」などの名詞類を取り上げ、語彙体系の細分化・非細分化の状況を対照的に分析する。

◆関東支部例会

◇第 2 回：2024 年 2 月 18 日（日）午前 9 時～　オンライン（Zoom）による開催

・中西千香（立命館大学）：動物園のレアリア

レアリアを中国語教育に落とし込む際に、一番にすることはそのレアリアの特徴をつかみ、分析することである。今回は、その対象を「動物園」に焦点をあて、レアリアの中身やどのような教育的価値を持つのかを紹介し、レアリア分析の手法をみせる。動物園のレアリアをみると、動物園の禁止事項や注意事項の表示と動物の生態や行動などを伝える“科普（科学普及）”に大きく分かれる。特に後者はバラエティに富んでおり、様々な手法で我々に紹介している。

・石崎博志（関西大学）：中級の壁と中国語の文語

外国語学習の Plateau effect は、日本の中国語教育では中級の壁と呼ばれてきた。Richards(2008)は伸び悩みの一般的要因を学習者側から論じるが、日本の中国語教育をみた場合、その要因は学習者にのみ求められるのだろうか。本発表では中西科研で発表者が取り組んだ研究を批判的に振り返り、中級から上級にかけて文語表現が増加することを踏まえ、中級の壁を乗り越えるひとつの方策としてレアリアを使用した文語学習を授業に導入する試みについて考えたい。

・塩山正純（愛知大学）：成語をつかう中国語のコミュニケーション

一般的に日本語母語話者の日常のコミュニケーションで成語が出現することは稀で、咄嗟に思いつくのは式辞や大相撲の昇進伝達式での挨拶くらいであろうか。一方、中国語では、ニュース、新聞など書面語は勿論のこと、会話でも多用される。本発表では、中西レアリア科研で発表者が扱ってきたインタビュー記事、新聞報道、戦前のテキストなどの事例を通して、中国語のコミュニケーションの重要な表現手段である成語が、どんなニュースの内容、どんな会話の内容で使われるのかを（じぶんが使えるために）知る工夫について考えたい。

・明木茂夫（中京大学）：誤訳に学ぶ翻訳論

漫画やアニメにはこの分野独特の約束事や言葉遊びなど、外国語への翻訳を困難にする様々な要素が存在する。その意味で漫画・アニメの中国語翻訳版はレアリアとしての利用価値が大きい。従来は翻訳困難な箇所を巧みに訳している事例に注目することが多かったが、ここでは敢えて誤訳の多い作品をとり上げる。誤訳をあげつらうのではなく、なぜ誤訳が生じたのかを検証し、どう訳せばよりよいのかを考察することは、語学学習にも役立つし、さらに比較文化研究の面でも面白い事例を提供してくれる。

・植村麻紀子（神田外語大学）：レアリアとしての絵本―翻訳・読み聞かせプロジェクトを通して見えてきたもの―

発表者は 2021 年度からゼミの活動として日本語と中国語の絵本を翻訳し、日中両国の子ども達にオンライン(zoom)で読み聞かせる「日中２大学の学生による絵本翻訳・読み聞かせプロジェクト」に取り組んできた。対象や目的を明確にしたプロジェクトの中で、学生たちはどのように翻訳し、読み聞かせに臨んだのか、具体的な実践例を通して、レアリアとして絵本の持つ可能性について考察する。

・干野真一（新潟大学）：中国語レアリアとそれに対するコメントからの学び

本発表ではコメントを考察対象として、ニュースや SNS 投稿を用いた授業実践を報告する。コメントとは一つには学生による「ふりかえり」のことであり、レアリアを享受する学生の視点を改めて掘り下げる。もう一つには、ニュース記事等に対する読者からの「コメント」と「リコメント」を指し、それ自体が「レアリア」と言えるが、生きた表現やウィットに富んだ書き込みからは学べる点が多い。これらの考察から導き出されるレアリア活用法を提案する。

◆北陸支部例会

◇第 1 回：2024 年 3 月 16 日（土）午後 1 時～　オンライン（Zoom）による開催

・長谷川賢（立命館大学）：書面語正式体における接続詞“虽”と“虽然”の相違―“语体语法”の観点から―

本発表では、現代中国語の書面語正式体において常用される“虽”と“虽然”という 2 つの同義の接続詞について、“语体语法”（語体文法）の観点から両者の相違を明らかにする。両者の相違について、先行研究では、いくつかの考察が見られるものの、言語事実を正確に反映していない考

察が見られる。また、なぜそのような相違が見られるのか、という相違が生まれる要因について論じた研究は管見の限りほとんど見られない。本発表では、語体文法の“庄典体”（荘典体）を導入して考察することで、両者の語体の相違を示し、その語体の相違により生まれる文法上の相違、特に両者が用いられる文が表す事態の相違を明らかにする。

・福田翔（富山大学）：中国語の名詞修飾表現：タイポロジー・認知・SLA の観点から

中国語の名詞修飾節は、修飾節が中心語に先行する「前置型」であり、VO 言語では珍しいとされる。また、修飾節のタイプとしては、所謂ヨーロッパ型の関係節と区別される形での GNMCC（汎用的名詞修飾構文）の特徴を有する。本発表では、主に名詞修飾節構文のタイポロジーに基づき、中国語名詞修飾節の特徴を通言語的な視点も交えて整理し、名詞修飾語標識〈的〉の適用範囲の観察等も含め、その位置づけについて考察する。また、SLA（第二言語習得）では、目標言語の名詞修飾の習得で、母語の名詞修飾節の位置とタイプとの影響関係が議論されており、中国語学習者データの分析から中国語名詞修飾節の認知的特徴についても触れる。

◆東海支部例会

◇第 1 回：2024 年 3 月 30 日（土）午後 1 時～　オンライン（Zoom）による開催

・鄭欣悦（新潟大学大学院)：多項定語における構造と意味機能

多項定語とは、複数の定語が一つの名詞を修飾するもので、多くは複数の定語の位置関係に一定の優先順位があり、自由に前後の順番を入れ替えることは出来ない。(〇他们火热而真挚的心。*火热而真挚的他们的心。）しかし、数量詞と形容詞が多項定語として併用される場合には、前後に反転する用例がみられる。(〇一块小小的地方。〇小小的一块地方。）本発表では、日本語に比べ孤立語で語順の入れ替えの自由度が低い中国語において、位置関係の倒置が容認される数量詞と形容詞で構成される多項定語に焦点を当て、「数量詞＋形容詞＋中心語」の構造をI型、「形容詞＋数量詞＋中心語」をII型とし、各型の成立条件や相違について考察する。

・景源（新潟大学大学院）：“看起来”の意味拡張と証拠性特徴

本発表では、動詞構造“看起来”の意味拡張と証拠性的特徴について検討する。まず、“看起来”から挿入語に至るまでの意味拡張経緯を考察し、証拠性的機能の由来と変化について整理する。さらに、意味指向の変化という視点から“看起来”が提示する証拠の存在形式(物か、出来事か)を考察し、それに起因する“看起来”の移動現象を分析する。最後に、モダリティ副詞との共起状況に関する考察を通じて、“看起来”が表出する新情報の獲得方式およびその確信度との相関性を分析する。以上を通して、証拠性表現の有様とそれに反映される事態の捉え方について検討する。

・顧令儀（中京大学）：中国語の音声実態と『現代漢語詞典』（第 7 版）の発音注記について
―一部の多音字を中心に―

現代中国語の多音字語彙の発音を中心に、中国全土で実施したアンケート調査において得たデータと『現代漢語詞典』（第 7 版）の発音注記を照らし合わせた結果、一部の漢字に関して、実際話されている音声は、『現代漢語詞典』（第 7 版）の発音注記と異なることが判明し、『現代漢語詞

典』（第 7 版）の発音注記は必ずしも多数者の標準語（普通話）発音を反映しているとは限らないことが明らかになった。本発表は、アンケート結果を示しつつ、このような現象が生じた要因と考えられる、普段よく使われている漢字の語音、似たような意味、メディア環境の多様化などといった諸点の影響について分析し、このような現象を視野に入れて、教育現場で教科書や試験問題を作成する際の注意点を提案したい。

・稲垣智恵（中京大学）：中国語由来の流行語「好ハオ」「ハオい」について：その意味の推移と理解について

近年、中国語由来の“好”が日本の SNS において若年層を中心に「好ハオ」「ハオい」などの表記で用いられることが流行した。「JC・JK 流行語大賞」によれば、2022 年上半期コトバ部門の 4 位に「好ハオ」がランクインしている。「好」「ハオ」「ハオい」は、以前より中国語学習者らの間で特に「奇妙な」「おかしみのある」中国的なものを指す際に用いられていたようだが、近年の流行語「好ハオ」は、自分の好きなものや人を褒め称える際に用いられ、「よい、好き、魅力的」などの意味を持つ。中国語が現代日本の流行語になる現象は、これまであまり見られなかった。「好」は特定の層でのみとはいえ、なぜこのように流行したのか、その意味の推移と日本人の理解について述べる。

会議報告

■編集委員会

◆第 1 回編集委員会（『中国語学』271 号）

日時 : 2024 年 3 月 15 日（金）（Zoom によるオンライン）

出席者：吉川雅之（委員長）、飯田真紀、伊藤さとみ、宮本徹、李佳樑、鋤田智彦、吉田泰謙、盧建（以上委員）

【議事】

1. 『中国語学』第 271 号の投稿論文について

・投稿総数は 18 篇。審査の結果 16 篇を受理した。分野別内訳は歴史文法 5、現代文法 10、教育法 1 である。各篇について査読者各 3 名を決定した。査読報告書の提出期限を 5 月 5 日（日）とし、5 月 18 日（土）の第 2 回編集委員会において採否の決定を行うこととした。

2. 『中国語学』第 271 号の特集記事について

・2023 年度全国大会でのワークショップ「中国語の自然会話における聞き手行動の会話分析研究」の内容を発展させた論文 4 篇と趣旨説明 1 篇から成る特集記事を組むこととし、呉青青会員、張麗会員、陳力会員、吉陽会員に寄稿を依頼した。

3. 2024 年度学会奨励賞の候補者について

・『中国語学』第 270 号に掲載された論文の執筆者の中から 1 名を選出し、5 月 18 日（土）の第 2 回編集委員会において候補者を決定することとした。

4. 委員の交代について

・『中国語学』第 271 号の発行を以て交代する編集委員 4 名について、後任候補者の人選に関するスケジュールを確認した。

5. 『中国語学』J-STAGE 未登載分について

・『中国語学』第 256 号（2009 年）から第 265 号（2018 年）までの 10 号分（10 年分）が J-STAGE で未登載となっていること、およびそれを登載することの能否についての初歩的調査の結果が吉川委員長から報告された。そして、10 号分を登載する上で著作権に関する問題が存在するか否か、および問題が存在する場合はどの様な手続を踏むべきかについて議論を行った。

6. その他

・2023 年 9 月に『中国語学』の投稿規程・執筆要領が改訂されたが、学会ウェブサイトに掲げられている投稿規程・執筆要領の中国語訳はそれに対応していない。そのため、改訂を反映させた中国語訳の作成を行うことが確認された。

・『中国語学』投稿用テンプレート（2023 年 11 月改訂版）には頁数や注番号が付されていないため、これらを補う微調整を施すこととした。

◆第 2 回編集委員会（『中国語学』271 号）

日時 : 2024 年 5 月 18 日（土）（Zoom によるオンライン）

出席者：吉川雅之（委員長）、飯田真紀、伊藤さとみ、宮本徹、李佳樑、鋤田智彦、吉田泰謙、盧建（以上委員）

【議事】

1. 『中国語学』第 271 号の投稿論文の採否について

・受理した投稿論文 16 篇について、査読結果に基づいて審議した結果、3 篇を要二次審査、13 篇を不採用とした。要二次審査の 3 篇については、6 月 30 日（日）必着で修正論文の提

出を求め、編集委員会において二次審査を行った上で、掲載の可否を最終決定することとした。

2. 『中国語学』第 271 号の特集記事について

・特集記事に関する進捗状況を確認した。

3. 2024 年度学会奨励賞の候補者について

・第 1 回編集委員会で選出した 1 名の執筆者について審議を行い、最終的な結論に達した。

4. 委員の交代について

・『中国語学』第 271 号の発行を以て交代する編集委員について、後任候補者の人選の状況を確認した。

5. その他

・『中国語学』投稿規程・執筆要領について、改訂を反映させた中国語訳が作成されたので、確認を行った。

■大会運営委員会

◆第 1 回メール審議（2023 年 12 月 8 日～26 日）

委員：橋本永貢子（委員長）、石崎博志、浦山あゆみ、佐々木勲人、島村典子、張玥、張恒悦、戸内俊介、野原将揮、福田翔、吉田泰謙

【議事】

1.「ミニ講義」について

・大会のより一層の充実を目的に、「ミニ講義」（仮称）を新設することについて審議した。

◆第 2 回メール審議（2024 年 2 月 16 日～23 日）

委員：同上

【議事】

1.「招待発表」（ミニ講義）について

・継続審議としていた「ミニ講義」について、名称を「招待発表」とし、その他、詳細について審議した。

2.「懇親会」の開催について

・第 74 回大会では、アルコール類を伴う食事の提供を行う懇親会（有料）を行うことについて審議した。

3. ワークショップ応募規定の確認

・第 74 回大会の公募に先立ち、ウェブサイトに掲載する応募規定の修正・確認を行った。

◆第 3 回メール審議（2024 年 3 月 18 日～30 日）

委員：同上

【議事】

1. 研究発表応募書類等の確認

・第 74 回大会の一般研究発表の公募に先立ち、ウェブサイトに掲載する各種応募関係書類の修正・確認を行った。

◆第 4 回メール審議（2024 年 5 月 6 日～11 日）

委員： 橋本永貢子（委員長）、石崎博志、浦山あゆみ、加藤晴子、島村典子、張玥、張恒悦、戸内俊介、野原将揮、福田翔、吉田泰謙

【議事】

1.「招待講演」の名称の変更について

・「招待発表」を新設するにあたり、「特別講演」と改称することについて審議した。

2. 第 75 回大会開催校について

・候補校について審議した。

■学界展望編集委員会

1. 2023 年「学界展望　語学」の編集

・2024 年 3 月 1 日に学界展望編集委員会委員に執筆依頼を送付し、5 月 20 日をめどに初稿を取りまとめることとなった。文字数は例年通り 15,000 字。

・今次の学界展望は、2024 年 10 月発行予定の『日本中国学会報』第七十六集に掲載され、

『中国語学』第 271 号に転載される予定である。

2. 2022 年「学界展望　語学」の中国語版

・昨年度お認めいただいた翻訳補助チームの増員メンバーとして、関西学院大学の季鈞菲氏に業務を依頼し、ご快諾いただいた。

・今年度は 2022 年の「学界展望　語学」中国語版が作成されるはずであるが、2024 年 5 月 5 日現在、中国語訳を担当する中国社会科学院文学研究所からの連絡はない。

■2024 年度第 1 回理事会

日時：2024 年 5 月 19 日（日）13 時～16 時
（対面と Zoom のハイブリッド開催）

出席者：佐々木勲人（会長）；松江崇（副会長）；伊藤さとみ、加藤晴子、下地早智子、三宅登之、山崎直樹（以上理事）；吉川雅之（編集委員長）；橋本永貢子（大会運営委員長）；鈴木慎吾（ウェブリソース委員長）；下地早智子（学界展望編集委員長 [兼任]）；金佳、上田裕、今村圭（以上幹事）

欠席者：鈴木慶夏（理事）

【報告事項】

1. 一般報告

(1.1) 役員・委員等の異動

・評議員交代

関東支部：町田茂会員（山梨大学）
→王振宇会員（中央学院大学）

(1.2) 会員動向（2024 年 4 月 1 日現在）

・会員数　4 月 1 日現在　（増減は 2023 年 10 月 1 日を基準とする）

			4/1 現在	増減
総会員数（賛助会員をのぞく）			886 名	－33
	（内訳）	顧問	10 名	＋2
		名誉会員	11 名	±0
		通常会員	800 名	－33
		団体会員	4 名	±0
		海外会員	61 名	－2
賛助会員			19 社	±0

〔昨年度除籍者〕　32 名（国内会員　29 名 / 海外会員　3 名）

2. 支部例会関連

(2.1) 支部例会世話人交代

東海支部：張勤会員（中京大学）
→稲垣智恵会員（中京大学）

(2.2) 今年度の例会開催予定

北海道　（山田敦士会員）：1 回
関　東　（野田寛達会員）：2 回
北　陸　（加納希美会員）：1 回
東　海　（稲垣智恵会員）：1 回
関西・四国（田中智子会員）：2 回
中　国　（荒見泰史会員）：1 回
九　州　（木村裕章会員）：2 回

(2.3) その他

発表希望者の減少により、例会の開催が困難になっている支部があるという報告があった。

3. 大会運営委員会報告

橋本委員長より次の報告があった。

(3.1) 委員の交代について

伊藤大輔会員→吉田泰謙会員（2023 年 12 月 1 日。開催校代表委員）

佐々木勲人理事→加藤晴子理事（2024 年 4 月 1 日。理事会枠委員）

(3.2) 第 73 回大会で見られた問題について

問題点を整理し、対応策を検討・確認した。

(3.3) 第 74 回大会の準備状況について

1）日程・開催校・代表

2024 年 11 月 2・3 日（土・日）、関西外国語大学、吉田泰謙会員

※ 託児所を学内に設置

2）特別講演（「招待講演」より名称変更）

周韧教授（北京大学・非会員）、任鷹会員（神戸市外国語大学）

3）各種発表募集期間

ワークショップ：5 月 17 日～5 月 31 日

研究発表：6 月 16 日～6 月 30 日

4）予稿集原稿提出期間

9 月下旬を予定。

5) 参加申し込みおよび参加費

Peatix（ピーティックス）による事前の参加申し込みおよび参加費の支払いを推奨。当日受付もあり。

4. 編集委員会報告

吉川委員長より次の報告があった。

(4.1) 『中国語学』第 271 号の投稿論文の採否について

・受理した 16 篇の投稿論文を査読結果に基づいて採否の判定を行い、3 篇を要二次審査、13 篇を不採用とした。

(4.2) 『中国語学』第 271 号の特集論文について

・昨年度全国大会で行われた「会話分析」をテーマとしたワークショップの内容を発展させた論文を掲載することを、呉青青先生（長崎外国語大学）に依頼した。

(4.3) 2024 年度学会奨励賞の候補者について

・第 2 回編集委員会において候補者について審議し、最終的な結論（該当者なし）に達した。

5. 学界展望編集委員会報告

下地委員長より次の報告があった。

(5.1) 2023 年「学界展望　語学」の編集

・学界展望編集委員会委員に執筆を依頼した。

(5.2) 2022 年「学界展望　語学」中国語版

・2022 年の「学界展望　語学」中国語版は、2024 年 5 月 19 日時点で未刊行である。

6. 中国語学セミナーについて

山崎理事より第 6 回中国語学セミナーの開催予定について報告が行われた。

7. 除籍候補者と住所不明者について

佐々木会長より、除籍候補者と住所不明者の今年度の状況について報告が行われた。併せて、住所不明者に関する情報提供が呼びかけられた。

【審議事項】

1. 全国大会における新たなセッション（招待発表）の設定について

・「招待発表」というセッションの設定が提案され、審議の結果、承認された。

2. 全国大会における懇親会の開催について

・懇親会をコロナ禍以前の形式に戻すことが承認された。

3. 第75回全国大会について

・以下の通り開催されることが承認された。

［日程］2025 年 11 月 8・9 日（土・日）（予定）

［開催校］東北大学川内キャンパス（宮城県仙台市）

［代表者］張佩茹会員

［開催形態］対面

4. 2024年度学会奨励賞について

・編集委員会による最終的な結論（該当者なし）が承認された。

5. 『中国語学』J-STAGE未登載分について

・『中国語学』第256号から第265号までの電子アーカイブ化に伴う著作権行使の許諾に関

する公告（お願い）を行い、対応することが承認された。

6. 投稿用テンプレートと誓約書の微調整について

・投稿用テンプレートと誓約書の微調整に関する変更が承認された。

7. 顧問・名誉会員の推挙について

・ニューズレターに名誉会員の推挙依頼を掲載することとした。

8. 能登半島地震に関わる会費の免除について

・佐々木会長より、2024年1月1日に発生した能登半島地震が特定非常災害に指定されたことを受け、被災した会員に対して2024年度分の会費を自己申告に基づき免除したい旨の提案があり、承認された。

全国大会および支部例会、「中国語学セミナー」開催のお知らせ

第 74 回全国大会開催のお知らせ

すでに学会ウェブサイトでご案内しておりますとおり、今年度の大会は関西外国語大学を本部として 11 月 2 日（土）～11 月 3 日（日）に対面で開催されます。ふるってご参加下さいますようお願い申し上げます。本年度の発表申し込み期間は、6 月 16 日（日）より 6 月 30 日（日）です。

採択者一覧、大会プログラムは 7 月末以降に学会ウェブサイト上に順次アップする予定です。なお、予稿集は第 70 回より電子版のみの刊行となっております。詳細は学会ウェブサイト等をご参照ください。

（事務局）

今年度の支部例会実施予定

各支部の例会実施予定は次の通りです。

北海道支部：1 回（9 月）
関東支部：2 回（7 月、2025 年 2 月）
北陸支部：1 回（2025 年 3 月）
東海支部：1 回（12 月）
関西・四国支部：2 回（6 月＜中止＞、12 月）
中国支部：1 回（6 月）
九州支部：2 回（7 月、12 月）

発表者、参会者ともに歓迎します。ただし、開催時期および回数は変更になることもありますのでご了承ください。開催予定、申込締め切り、連絡方法などにつきましては学会ウェブサイトでご確認ください。発表者の方には発表要旨（300 字以内）の事前提出をお願いしています。この要旨は学会ウェブサイト上の例会案内のページで紹介され、支部例会の活動記録として保存されます。開催に関する詳細については、各支部の例会世話人までお問い合わせください。

（事務局）

第 6 回「中国語学セミナー」開催

・開催日時：2024 年 9 月 7 日（土）
　　14:30～18:00（日本時間）
・開催形式：Zoom によるオンライン講義
・聴講料：無料
・講師（登壇順）および講義題目：

14:40-16:10 朱春躍「中国語音声：4 つの重要チェックポイント」

1.母音 u の調音
「円唇音」に対する誤解を実験により正し、中国語母音 u の調音で最重要なポイントが何かを、MRI 動画等で示す。
2.有気音は破擦音（二重子音）の一種
「有気音」は「破擦音（ts,tɕ など）」と同じく「二重子音」であり、調音のポイントは単なる呼気の強さではない。
3.声調のほかに、「ストレス」も重要
中国語のストレスは「軽声」で知られているが、軽声ではない「軽読」も意味を区別するうえで重要である。
4.「句重音」と「焦点」の表現手段
文法構造・意味構造による句/文アクセントと「焦点」の表現手段は語のストレスと共通している。そのルールは日本語と変わらない。

16:20-17:50 井上優「日本語研究者から見た中国語のアスペクトとモダリティ」

日本語文法の研究者にとって中国語は非常に興味深い言語である。このセミナーでは、井上が日本語文法研究者の立場からおこなってきた（あるいは現在おこなっている）日本語と中国語の対照研究の例を紹介するとともに、対照研究の立場から「日本語母語話者のための中国語文法の説明」について考える。とりあげるのは、主にアスペクトとモダリティに関する現象である。具体的には「継続相形式の意味」「文末助詞の意味」をとりあげる予定である。

（事務局）

2024 年能登半島地震に関わる会費免除について

2024 年 1 月に発生した能登半島地震で被害を受けたみなさまに、心よりお見舞いを申し上げます。この地震で被災された会員に対し、2024 年度の会費を免除いたします。免除を希望される方は、氏名、住所、所属、メールアドレス、被災状況を学会事務支局まで電子メールでお知らせください。2025 年 3 月 31 日まで受け付けます。

（事務局）

2024 年 6 月

『中国語学』第 256 号から第 265 号までの電子アーカイブ化に伴う著作権行使の許諾に関する公告（お願い）

会員ならびに『中国語学』掲載論文著者　各位

日本中国語学会では 1947 年３月以来、学会誌『中国語学』を刊行して参りました。喜寿を祝うべき七十七年という長きにわたって刊行を続けることができましたことは、会員各位のご支援、ご協力のたまものに他なりません。心より感謝申し上げます。

昨今の学術を取り巻く環境の変化には目を見張るものがございますが、本学会では人類の知の共有という視点に立って『中国語学』の学術的価値をより一層高めるために、取り組みを行って参りました。その一つが科学技術振興機構（JST）の学術雑誌電子アーカイブ事業への応募でした。応募の結果、2008 年度に『中国語学』は電子アーカイブ化の対象として採択され、底本の手配がついた号については第 1 号から第 255 号（2008 年発行）までの全号が、JST が運営する電子ジャーナル公開システム J-STAGE に登載され、2011 年までに公開されました。

256 号（2009 年発行）およびそれ以降の号は上記事業の対象とはなっておりません。しかし、2016 年から 18 年にかけて『中国語学』電子化が推進されたことで、現在では 266 号（2019 年発行）およびそれ以降の号について、掲載論文と学界展望は冊子版発行と同時に電子版としても発行され、かつ J-STAGE に登載されています。そして、発行後 1 年が経過した時点で J-STAGE で公開されるようになっています。

この度、J-STAGE で未登載となっている 256 号（2009 年発行）から 265 号（2018 年発行）までの 10 号分（10 年分）を対象として、掲載論文と学界展望を登載、公開することの能否について編集委員会で検討し、理事会で審議を行いました。『中国語学』が全号とも J-STAGE に登載されることは本学会にとっての宿願であると同時に、『中国語学』の学術的価値の向上という観点からも優先して進めるべき事業であると思われます。その一方で、当該期間には「日本中国語学会著作権規定」が制定された 2013 年以前の期間が含まれています。そこで、256 号（2009 年発行）から 265 号（2018 年発行）に掲載された論文および学界展望を登載、公開するに当たり、著作権（複製権および公衆送信権）の行使を本会に許諾していただきたく、ここに公告いたします。

本来であれば著者各位に直接お願いを差し上げるべきところでございますが、編集委員会と事務局にその人的余力がないことと本事業の意義をどうかご理解いただき、この公告を以て著作権の行使を許諾いただければ幸いに存じます。

この件に関しましてご了承いただけない場合、あるいはご不審の点がございます場合は、2024 年 8 月 31 日までに、本会事務局まで文書にてお申し出下さい。お示しした期限までにお申し出がない場合、本公告の内容についてお認めいただけたものとさせていただきます。尚、著者であって退会された方、あるいは物故者の場合、その著作権者であるご遺族が本公告を期限内に知る機会がない可能性もあろうかと存じます。それらの方々からのお申し出につきましては、期限を過ぎましても個別に対応させていただく所存です。

2024 年 6 月 10 日

日本中国語学会会長　佐々木勲人

事務局からのお願いとお知らせ

■ 名誉会員の推挙について

名誉会員の推挙は、9 月 30 日までに推薦文を添えて、事務局宛にメール送付をお願いします。なお、名誉会員称号授与の条件は、年齢満 70 歳以上で継続して 20 年以上本会会員であった方のうち、本会の発展に功労のあった方となっており、理事会、評議会の審議を経た上で会員総会において決定されます。

■ 住所不明の会員

事務局より送付した郵便物が返送されてきた会員のお名前を掲げておきます。もし御自身のお名前を見つけられましたら、速やかに e-naf から住所変更の手続きを行なってください。またお知り合いの方のお名前がありましたら、事務局までご連絡をお願いします。

荒屋勸、泉興長、張桂珠、鄭亨奎、丁鋒、苞山武義、楊明、呂昭明、井川壽子、小松紘一郎、陳瑩、張翼翔、若林ゆりん、小西真帆、郭楊、孫琰、徐佳、大久保蛍、劉峪伽、林智

■ 2024 年度会費納入のお願い

2024 年度（2024 年 4 月～2025 年 3 月）の会費（国内通常会員 6,000 円、海外会員 6,000 円）の納入をお願いいたします。8 月 31 日まで（**研究発表応募者は 6 月 30 日まで**）に会費納入専用振替口座【00980-6-282216 日本中国語学会】あてにお願いします。

内規により「2 年を超えて会費の納入がない場合は、当該会員に連絡の上、除籍」となりますのでご注意ください。

会費納入状況は、オンライン会員情報管理システム（e-naf）により直接ご確認いただくことができます。同システムは、住所・勤務先を始めとする各種変更手続きにもご利用いただけます。

オンラインクレジットカード決済も可能となっております。e-naf にログインの上、＜会費支払い状況確認＞からお支払いください。

■ 会員情報更新のお願い

オンライン会員情報管理システム（e-naf）にアクセスして、ご自身の会員情報の確認と更新をお願いします。

■ 退会について

退会は会費納付が前提となっています。退会ご希望の方は必ず会費納付後の年度内にお申し出下さい。

■ 予稿集の販売

過去の大会予稿集は、第69回以前のものは好文出版にて1,500円でお求めになれます。第70回以降の大会予稿集は電子版のみの発行（非売品）です。詳しくは学会ウェブサイトをご覧下さい。在庫につきましては好文出版（order@kohbun.co.jp）に直接お問い合わせ下さい。

■ 事務局の連絡先（2026 年 3 月まで）

事務局への送付先は以下の通りです：

〒305-8571 茨城県つくば市天王台 1 - 1 - 1
筑波大学人文社会系内
日本中国語学会事務局宛

また各種のお問い合わせは、学会ウェブサイト（https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/）内の「お問い合わせ」ページをご利用ください。

2024 年 6 月

訃　報

本学会名誉会員である佐藤晴彦先生（神戸市外国語大学名誉教授）におかれましては、2024 年 5 月 22 日に 79 歳の生涯を閉じられました。ここに謹んでお知らせいたします。永年にわたり本会と中国語学の発展に寄与されたご功績をたたえ、心からご冥福をお祈り申し上げます。

2024 年 6 月

日本中国語学会会長　佐々木 勲人

日本中国語学会会報 2024 年春季
（年二回発行）
発行者：日本中国語学会事務局
〒305-8571 茨城県つくば市天王台
1-1-1 筑波大学人文社会系内
E-mail: jimukyok_clsj@chilin.jp
URL: https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/
発行日：2024 年 6 月 30 日